

羅臼町における地域創生としての ESD の視点

北海道羅臼町教育委員会 自然環境教育主幹 金澤 裕司

1. はじめに

11月25日、立教大学において第2回全国 ESD・SDGs 自治体会議が開催された。羅臼町からは湊屋稔町長、和田宏一教育長以下4名が出席した。(和田教育長は26日のフォーラムのみに出席)

本自治体会議には対馬市、大牟田市、飯田市、勝山市、西伊豆町など12の自治体からの出席者があり、それぞれの事例報告と活発な討論が行われた。

羅臼町が ESD に取り組み始めたのは2012年頃からであり、比較的早い段階で立教大学 ESD 研究所長である阿部治先生のお誘いを受けて ESD による地域創生に取り組み始めた。

しかし、羅臼町の ESD は開始時に一般職員の間で ESD への関心を十分に高めることができなかった。このため ESD への理解が深まらないまま今日まで進んできたという側面があるのではないだろうか。

新たな物事が進展していく場合、積極的に進展する部分と進捗のはかばかしくない部分の両面がある。羅臼町の ESD にも評価できる側面と改善の必要な側面とがある。

本稿では主として羅臼町における課題に焦点を絞り、直面する課題の克服のため、今後の展開がいかにあるべきかの考察を試みたい。

2. これまでの経緯「知床学からの出発」とその限界

羅臼町教育委員会では、2008年頃から「ESD」を教育活動の中に意識的に位置づけはじめていた。そして、それは知床の自然環境教育として整えられた「知床学」にもっとも強く反映されていった。「知床学」それ自体は2007年の中高一貫教育開始に向けて中高生の統合的な自然環境学習の名称として作られたものである。しかし、それは誕生して間もなく ESD と出会ったことで、より幅広い意味を備えるようになった。

さらに2014年、町内すべての学校・幼稚園がユネスコスクールに加盟したことによって一貫教育を「中高」から「幼小中高一貫教育」へと拡大した。これに伴って知床学も幼稚園児から高校生まで貫かれた総合的な学習へと拡大し、それに対応するカリキュラムも次第に整えられていった。

では、総合的な学習の目指す目標とは何か。学習指導要領には次のように書かれている。

「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。」

(小学校学習指導要領第5章第1)

さらに「第3 指導計画の作成と取り扱い」には、

「(2) 地域や学校、児童の実態等に応じて、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な学習、児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うこと。

(3) 第2の各学校において定める目標及び内容については、日常生活や社会とのかかわりを重視すること。」

とある。

指導計画は学校ごとに立てるものだから、全町で一貫教育に取り組むのであれば、(3)の「日常生活や社会とのかかわり」の何を具体的に重視するかなどを学校間で共有する必要がある。また、一貫教育を主導する立場にある町教育委員会として、この点の調整と共通理解を図る努力が求められる。

課題の1つはこの点が不十分だったことではなかろうか。

さらには、教育委員会と首長部局の間でも課題を共有するという意識が希薄だったのではないだろうか。

では、課題が十分に共有されなかったのはなぜだろう。その背景として以下のような事が考えられる。

3. 課題 氾濫する課題と方策

「羅臼町の直面する一番の課題って何だろう？」

高校生に対して私はしばしばこのように問うてみることがある。

その答えは、漁獲の減少、魚種の変化、人口流出、高校存続の危機、町財政の逼迫、野生動物による被害、ゴミの散乱、空き家の増加、商店の減少など多岐にわたる。

さらに大人が感じる課題として全国学力調査の結果としての「学力」の低迷、貧困の拡大、少年の問題行動、町内における一極集中などが挙がる。

言うまでもなくこれらの課題は心ある町民、行政関係者、学校教育関係者の間で共有されていて、それぞれがそれぞれの立場で解決への努力が払われている。

だが、多岐にわたる多数の課題に目を奪われ、課題の生じる構造をじっくり見極める余裕がなかなか与えられない。その結果、場当たりの解決にエネルギーが傾注され、十分な成果を得られないままに終わってしまう場合が多いように思う。

1つの例として「学力」がある。全国学力調査の結果が芳しいものとは言えない現状で、どうにかして羅臼町の平均点を上昇させようとする努力が払われている。しかし、子どもたちの学びへの意欲が高まらない。高まらないどころか得点(平均点)を上げようとする学習活動は魅力に乏しい。子どもたちの勉強嫌いが広がり得点はさらに低迷する、という負の循環が生まれる。このような状況でESDの推進を持ちかけてもまともに耳を貸してもらえないことはまずない。

「総合的な学習なんかより算数、国語を」となってしまう。地域学習に取り組んだとして

も、それを教科学習と結びつけて発展させる方向には進みにくい。端的に言えば、地域を褒めて完結するような学習に留まってしまう。

4. 課題解決の方向性 舵と船頭の多い難破船

羅臼町には深刻な課題が多重的に存在することは既に述べた。

子どもたち、中でも高校生には、これらの課題をかなり深く捉え、構造的に理解することで課題解決に向かうツボがどこにあるのかを探ろうとする動きも出てきている。

だが残念なことにこの動きはまだ主流ではない。多くの大人の認識が必ずしも一致していないからである。しかし、大人は大人であるが故に大声で自説を主張する場合が多い。

その結果、羅臼町はたくさんの舵をたくさんの船頭が握っている船のようになっている。進むべき道が定まらず、同じ海域を迷走し続けている印象を受けるのである。

羅臼町で ESD が始められた時、根室管内で ESD という言葉を理解している人はごく限られていた。北海道内でもユネスコスクールがまだまだ少数であり同様の傾向があった。

「出る杭は打たれる」という諺を重視し、先進性に不安を感じる多くの人々にとって、ESD がいかに胡散臭く感じられたか、容易に想像できる。そして、この傾向は現在でもあまり変わっていないかも知れない。

こう考えてくると、われわれ教育委員会の「進め方」にも大きな反省点があったと考えられる。羅臼町における今後の方向性は、これまでの ESD の進め方を吟味し、ESD の裾野を拡げるための努力をより強めていかなければならない。

ただ、最後に確信をもって言えることが1つある。それは、ESD 自治体会議での自治体間の交流があったからこそ以上のような振り返りが可能だったということである。さらに、今後の進むべき方向を見出すために多くの示唆を受けられることが期待できるのがこの自治体会議だという点である。

これまで自治体会議で出会った全ての自治体関係者、研究者、実践者の皆様にあらためて感謝するとともに、今後のご指導の継続をお願いしたい。